

自由主義擁護の旗手として活躍した政治・外交評論家

清沢 冽 (きよさわ きよし)

徳高 青木花見 (あおけみ) 出身

〈清沢 冽が活躍した時代〉 1890(明治 23)年～1945(昭和 20)年

享年 55 歳

明治			大正					昭和					
23	36	39	3	7	8	10	15	2	5~7	13	18	20	29
徳高青木花見に生まれる。 (あおけみ) 研成義塾で学ぶ。			三友新聞の一つであるサンフランシスコ「新世界」に編集長として招聘される。					朝日新聞社企画次長に抜擢され中央公論等にも寄稿して評論家としての名声を高める。報知新聞論説委員となり活躍し退社後自由人として各雑誌新聞に執筆する。結婚 二子をもうける					
渡米しシアトルからタコマへ移り住み勤労しながら初等学校へ通学する。			実業家を目指し帰国し横浜の菅川貿易商會に勤務する。					欧米での取材執筆活動に当たる					
シアトル旭新聞に寄稿。シアトル文壇にも顔を出す。			新聞社「北米新聞」タコマ支社主任となり討論会・演説会等を催しシアトル旭新聞に寄稿。シアトル文壇にも顔を出す。					朝日新聞社企画次長に抜擢され中央公論等にも寄稿して評論家としての名声を高める。報知新聞論説委員となり活躍し退社後自由人として各雑誌新聞に執筆する。結婚 二子をもうける					
大東亞戦争・太平洋戦争(S19) 国際ペンクラブ世界會議日本代表として欧米を訪問する。			新聞社「北米新聞」タコマ支社主任となり討論会・演説会等を催しシアトル旭新聞に寄稿。シアトル文壇にも顔を出す。					朝日新聞社企画次長に抜擢され中央公論等にも寄稿して評論家としての名声を高める。報知新聞論説委員となり活躍し退社後自由人として各雑誌新聞に執筆する。結婚 二子をもうける					
盧溝橋事件 (S12)			新聞社「北米新聞」タコマ支社主任となり討論会・演説会等を催しシアトル旭新聞に寄稿。シアトル文壇にも顔を出す。					朝日新聞社企画次長に抜擢され中央公論等にも寄稿して評論家としての名声を高める。報知新聞論説委員となり活躍し退社後自由人として各雑誌新聞に執筆する。結婚 二子をもうける					
満州事変 (S15)			新聞社「北米新聞」タコマ支社主任となり討論会・演説会等を催しシアトル旭新聞に寄稿。シアトル文壇にも顔を出す。					朝日新聞社企画次長に抜擢され中央公論等にも寄稿して評論家としての名声を高める。報知新聞論説委員となり活躍し退社後自由人として各雑誌新聞に執筆する。結婚 二子をもうける					

軍国主義、国家社会主義の世の中で、自由主義に基づく政治・外交評論を貫いた。



**議会制民主主義を支えている自由主義は古くない！
社会的、政治的な形が変わっても基本的人権は絶対に守らねばならぬ！**

自由民権運動から始まる2度の護憲運動によって生まれた議会制民主主義が、軍国主義化の中で、もっと政府の力を強くしていこうとする国家共産主義、国家社会主義の方向に動いていき、議会制民主主義を支えている自由主義は遅れた思想だとされた時代に、自由主義は古くないと主張。

この考えが植原悦二郎、吉田茂につながり戦後の憲法制定などへと引き継がれていった。吉田茂、石橋湛山という後に首相となった2人とは友人関係であり、特に三郷村出身の植原悦二郎(明治憲法下に国民権論、象徴天皇論等を唱えていた大正デモクラシー期の急進的自由主義者。戦後、吉田内閣の国務大臣)とは、渡米中2年間シアトルでの生活を共にした親友だった。

「清澤がその評論で示した日米関係の認識は、同時代人の中で、例外的なまでに鋭いもの」
「今日の日本外交、とくに日米関係を考える上で、なお新鮮さを失わぬ根底的で鋭い洞察」

北岡伸一「日米関係への洞察」中公新書 1987

『経済力こそ国の基』満州に対する日本の立場についての意見 *その先見性にびっくり！*

○中国は、満州を含めて統一されるだろう。利権などそれほどない満州に日本が固執し、日中関係を悪化させてはならない。重要なのは、中国市場であり、将来豊かになる中国は、日本に多大な利益をもたらす。

清沢冽の考え方、信念の源はここにあり！井口喜源治の一周忌における言葉

井口先生によって世の中には金や地位や名誉よりも、もっと大切なものがある事を知りました。それは信念です。私は過去において、また現在において自分が考えて正しいと思う事を曲げたことはありません。未信者の私は愛する国家のために正なりとするところを及ばずながら主張するのです。時には自己一身の不利を覚悟しながら。

清沢は、井口喜源治の教え子の中で筆頭に上げられる人物である。師と同じクリスチャンの道を選ばなかったが、人としての生き方をどうあるべきかを信念として生きた。



清沢冽「暗黒日記」1954年に東洋経済新報社で出版され、数社で新版刊行された。

太平洋戦争当時、自由主義が弾圧された戦時下において、今後の世界、日本のあり方を考えるため、戦時中の日本、世界を鋭いまなざしで見つめ書き綴った日記

○毎朝のラジオを聞いて常に思う。世界の大国において、貧弱にして無学なる指導者を有した国が、類例ありや。国際政治の重要な時代にあつて、国際政治を知らず。全く世界情勢を知らざるものによって導かるる危険さ。

○今度の戦争で、日本人は少しは、利口になるだろうか。非常な疑問である。教育を根本的に変えなければ。

参考文献

- 「南安曇郡誌第3巻下」南安曇郡誌改訂編纂会/編 安曇野市立図書館 「暗黒日記」岩波文庫 評論社
- 「ガイドブック・安曇野の里 穂高ものがたり」中島博昭 1977 出版安曇野
- 「日米関係への洞察」北岡伸一 1987 中公新書